

# パリの文芸キャバレー跡（1945-1965）調査

吉田正明・三木原浩史共同研究（2011.2.11～2.19）

## はじめに

5年間に及ぶ過酷な戦争と占領を味わったパリは、開放後、まるで暗かったその時代を一掃するかのように至る所で祝祭ムードに包まれた。その開放感を様々な形で表出させた場所が、サン＝ジェルマン・デ・プレやモンパルナスなどのナイトクラブやキャバレーやカフェ、あるいは地下酒場や小劇場に他ならない。とりわけ隆盛したのが、シャンソン、ジャズ、ダンス、詩の朗読、寸劇、パントマイム、モノローグ、手品、アクロバット等、様々な演芸や音楽、あるいは歌や文学が交錯する場であったキャバレー Cabaret であった。そこに漲っていたのは、喜び、笑い、感動、フランス人の好きなお祭り騒ぎ、要するに熱狂的な生の謳歌に他ならなかった。キャバレーはまた新人アーティストたちの登竜門でもあった。ブラッサンス、ブレル、グレコ、ベアール、フェラ、バルバラ、ゲンスブール、ムスタキなど後に有名になる歌手たちの多くは、まずパリのキャバレーでデビューしたのである。しかしそこは新人アーティストたちにとっては厳しい試練の場であった。オランピアなどの劇場とは異なり、狭い空間の中で飲み食い雑談する客たちの前で、いかに自分の歌を聞かせるか、認知してもらうか、それは並大抵のことではなかった。客の囁きや息遣いまで聞こえてきそうな至近距離で、彼らの視線を強く感じながら歌うことは、かなり緊張を強いられたであろうことは想像に難くない。最初はあがってしまい、持ち味が出せないまま失敗してしまうケースも度々あったことであろう。現にブラッサンスやゲンスブールがそうであったように。逆に言うと、そのような試

練の場を経験し、なにものにも動じない確固たるスタイルを築いたものこそが後にスターダムにのし上がることができたのである。キャバレーでデビューしたてのそのような新人アーティストたちのギャラはたいていわずかであったが、そこには、今では失われた感がある大いなる自由と創造の息吹が漲っていた。

しかしながら、キャバレーの黄金期は 60 年代になると陰りを見せ始める。観客はもはやキャバレーに足を向けなくなる。ラジオやテレビやレコードの普及が彼らを自宅に足止めしたからである。さらには中流のパリジャン、パリジエヌたちは、週末になるとマイカーで田舎に買い求めたセカンドハウスへと行くようになる。経済成長がもたらした中流家庭のささやかな夢の実現と言えようか。シャンソン界にも大きな変化が訪れる。ロック好きの若者を中心に流行したいわゆる *yé-yé* ブームがフランスを席卷し、反政府反体制を歌う政治的メッセージソングや良質な文学的シャンソンが等閑にされていく。

社会的な変化も見逃せない。1962 年にフランスの財務省がキャバレーも含め娯楽や飲食業を営むオーナーに対して、雇用しているすべてのアーティストの社会保障への加入を義務付けたのである。それまでは、キャバレーに出演していたアーティストはその日の出来高払いという形で報酬を得ていたのであり、ちゃんとした契約書も交わすことなく、支払い明細書もないのが実情であった。さらには、SACEM（作詞家作曲家楽譜出版社協会）は、すべての演芸娯楽施設の興行師（リドであろうがラ・コロンブであろうが）に対して、そこで歌われたシャンソンの歌詞と音楽の著作権料として、収益の 1% を支払うよう命じるようになるのである。小さなキャバレーは店じまいする他なかったのである。

吉田と三木原は、日本学術振興会の科学研究費補助金を得て、第 2 次世界大戦後約 20 年間隆盛したこのようなキャバレーの跡地を訪ね歩き、往時に思いを馳せながら、そこが現在どのような場所になっているかを調査した。以下、その調査報告を簡略に記すことにする。ただこれは 2011 年 2 月時点の現状報告であり、将来当然また変貌を遂げていくことであろう。[吉田記]

(註：吉田と三木原が、個別に訪れて現況調査したキャバレー跡一覧と簡潔な報告、特に印象深かった箇所には、◎を付した。)

## 左岸 Rive Gauche

### 【4区】

○◁La Colombe≫ 4, rue de la Colombe

Le Tambour d'Arcole という bar になっている。[吉田記]

### 【5区】

◎◁Aux Trois Mailletz≫ 56, rue Galande

現存。古い通り（パリの歴史のプレートあり）にまだ残っている。南国のムードを漂わせていた。[吉田記]

○◁Le Caveau de la Huchette≫ 5, rue de la Huchette

<jazz hot>という店になっている。La revue internationale du jazz 開催中。  
[吉田記]

○◁Le cheval d'or≫ 33, rue Descartes

<La Julia>という Restaurant franco-latino になっている。[吉田記]

○◁Chez Bernadette≫ 16, rue des Bernardins

<Curio Parlor cocktail Club>という店になっている。[吉田記]

○◁L'Ecole Buissonnière≫ 10, rue de l'Arbalète

ムフタール街の近くにあったこの店の跡にはなにも残っておらず、普通の民家となっていた。[吉田記]

○◁Le Club de la Contrescarpe≫ 6, place de la Contrescarpe

行ってみたものの、跡地を確かめることはできなかった。住所表示の場所が分からず。[吉田記]

○◁Le Club des Lorientais≫ 5, rue des Carmes

<Hôtel des Carmes>という2つ星のホテルになっている。[吉田記]

○《La Méthode》 4, rue Descartes

<La Madeleine de Proust>という salon de thé になっている。[吉田記]

○《Le Petit Pont》 1, rue de Petit-Pont

<Le Petit Pont>というカフェになっている。ここでエスプレッソを1杯休憩がてら飲む。[吉田記]

○《Le Port du Salut》 163 bis, rue Saint-Jacques

レストラン《AU PORT SALUT》。店の前に〈IL ETAIT UNE FOIS LE PORT DU SALUT〉と記された大きなプレートがある。[吉田記]

○《Le Gipsys》 ou 《Les Folies Furieuses》 ou 《Le Potofou》 20, rue

Cujas. <Hôtel Excelsior>という2つ星のホテルと<Cinéma Salle Anatole Dauman>という映画館に取って代わられている。[吉田記]

◎《La Vieille Grille》 1, rue du Puits de l'Ermitage

現存。今も小劇場として残っている。『パリ・スコープ』にも掲載されている。この日は、Vania et ses amis《Les Raconteries de Paris sur Scène》, Dim 13, 11 h 30, Pl. 13€とあった。[吉田記]

〈THEATRE DE LA VIEILLE GRILLE〉という小劇場。2011年3月19日(火) 18:00からの公演に、当日券を当てに訪れる。出し物は《Chansons à réaction》と銘打たれていて、出演は Isabelle GUIARD(Chant,Piano), Damien ROBILLOT(Chant,Guitare)とあった。料金は18ユーロ。狭い入口を入ったすぐ左手にバーのカウンターがあり、そこが切符のレセプションも兼ねていて、爺さんがひとり(手伝いの女性も横手にいたが)、切符の受付をしている。代金を払えば、ワイン等のアルコールと簡単な食べ物がとれる。場内は、20数名も入れば満席。説明書には、以下のように記されていた。

《Ils sont deux, un duo en somme.Et c'est tant mieux. Pas de tambours, pas de trompettes, pas de chichi... Juste de la musique qui fait du bien à les oreilles et des chansons qui font du bien à le cœur. Attention, à tous les

cœurs. Les jeunes, les vieux, les tout neufs, les sensibles, les fragiles, les endurcis, les bancals, les tout cassés... Paraît même que ça fait du bien aussi à les cerveaux. Pour ceux qui aiment l'humour... les oreilles et les cœurs n'ont rien contre, s'raient même plutôt pour. Puisque «chansons à réaction» c'est fait pour ça, c'est même aussi pour ça qu'on aime. C'est drôle, intelligent, beau et divertissant... Quoi de plus ? Non mais dites donc, c'est déjà pas mal, non! »

男女で組んだ一種のヴォードヴィルのような感じがした。歌はあまり上手くない。狭い舞台を精一杯生かして、歌って、動き回ってだが、あまり上質とはいえない。場末の、受けない三流役者が、それでも一生懸命演じていることは評価しよう。観客は、ほとんどが観光客だが、あと幾人か、こういう場末の出し物につきものの、縁者の知り合い・関係者とおぼしきものたちとかなる。終演のあと、出演者としきりに挨拶を交わし、場合によっては、頬にキスしたりしているから分かる。今宵の観客も、『パリ・スコープ』か何かでも見つけたのだろう。クラシック系のオペラ座や、サル・プレイエルや、テアトル・デ・シャンゼリゼを楽しもうという人たちではもちろんなく、さりとて、ポピュラー音楽でも、オランピア劇場やカジノ・ドゥ・パリといった、大劇場をめざす客層でもない。パリの夜のちょっとしたスペクタクルを楽しみたいと思っただけのことなのだろう、演者のささやかな小芝居に、時に笑いと拍手をおくり、終ってからも2度、3度と舞台に呼び戻す暖かさを示した。

この劇場には、2004年の秋にも、来たことがある。同じ親父さんがカウンターにいたから、経営者かもしれない。その時は、シャンソン好きの知人、当時パリ・ジャルパック社長の柏原誠氏が同行した。10年に及ぶパリ勤務にもかかわらず、パリのこうした小劇場の存在は、一度も経験したことがない、とのことだった。その折は、『パリ・スコープ』の案内では、シャンソン各種

のはずだったが、看板に偽りあり、つまらないヴォードヴィルで（内容は忘れた）、ふたりともがっかりしたことを覚えている。外観・内装とも、昔ながらの風情はかもしているが、質は高くない。2度経験すれば、そう断定してよいだろう。オッフェンバック初演の劇場として有名な『ブッフ・パリジャン』（Théâtre des Bouffes Parisiens）が、かつて、ララ・ファビアンで長期公演を打っていたのとは落差が大きい。今回は、アラン・ドロンの娘と組んだ芝居を上演していた。【三木原記】

○◀◀La Grande Séverine▶▶ 7, rue Saint-Séverin

<Le Grand Bistrot>という Cuisine Traditionnelle を食べさせるレストランになっている。以前その隣の<Le Vieux Paris>というフォンデュ専門店でも八木香津帆さんとフォンデュ・サヴォワイヤールを食べたことがあったのを思い出す。【吉田記】

この店の前に辿り着いたのが、14 ; 30 ごろ。空腹を覚えたので、昼食をとることにしたが、Le Grand Bistrot が、外見立派で、入るのに一瞬躊躇したため、自然、足は Le Vieux Paris に吸い寄せられた。店内に客は、家族連れ4人と男性ひとり、そこへ私。「...ブルギニョン」という名の料理と、赤ワイン4分の1を食した。牛肉と野菜の盛り合わせだが、まあまあだった。息子と母親らしいのが取り仕切っていて、息子の方は愛想がよかった。【三木原記】

【6区】

○◀◀L'Arlequin▶▶ 131 bis, boulevard Saint-Germain

存在しない。131bis はなく、131 番地のみ。Place d'acadie と Boulevard Saint-Germain に面した角地を、ブラスリー-Léon de Bruxelles, Brasserie Belge が占領している。有名なチェーン店で、12 : 00 過ぎ頃とて、店内は満員だった。【三木原記】

○◀◀Les Assassins▶▶ 40, rue Jacob

<Le Petit Jacob>という Vins, Tartines & Assiettes を扱う店になっている。

[吉田記]

◎《Le Bar Vert》 14, rue Jacob

<Zéro de conduite>という bar になっている。入口にプレートが掲げられており、ワグナーがこの家に 1841 年 10 月 30 日から 1842 年 4 月 7 日まで住んでいたことが記されていた。[吉田記]

Richard WAGNER 1813-1883 A vécu ici のプレートがあった。[三木原記]

○《Chez Moineau》 10, rue Guénégaud

<Ambiance Night OWL>というカクテルバーになっている。[吉田記]

○《Le Club Saint-Germain》 13, rue Saint-Benoît

<Marina Bessé>という Création & Design の店になっている。[吉田記]

吉田さんの見間違い？ 13 番地は、普通の建物。隣の 15 番地は、Catherine Houard という画廊(galerie)。[三木原記]

◎《Le Club du Vieux-Colombier》 21, rue du Vieux-Colombier

<Théâtre du Vieux-Colombier>という劇場として引き継がれている。《La Rose Rouge》と Bon Marché のすぐ近く。サン＝シュルピス聖堂にも近い。  
[吉田記]

○《Le Collège Inn》 28, rue Vavin

存在せず。現在、28 番地は、各種催し用の貸し室(?)。店名は SITATUNGA で、Réception Location(l'espace dévos soirés et événements)と大きく書き添えてある。扉の別の面には、Uniquement en privalisation Aniversaire, événements soirés, entreprises ou particuliers の表示[三木原記]

○《L'Echelle de Jacob》 10, rue Jacob

現存。今も店が残っている。[吉田記]

◎《L'Ecluse》 15, quai des Grands-Augustins

現在は同名のボルドー専門のワインバーになっている。店内は当時の店の雰囲気  
が保たれていて、奥の舞台があった所がバーのカウンターになってはい

るが、当時バルバラなどが弾いていたピアノがそのまま置かれていた。店員もここがかつて有名なキャバレーであったことを知っていた。今回のパリ滞在中3回訪れる。1回目は興味本位でワインバーの中がどのようなになっているかを確認するため、ハイネッケンを1杯休憩がてら飲むためであった。さすがはワインバー、付け出しのつまみにサラミがふんだんに出てきた。店員にお願いして店内を写真に撮らせてもらった。2回目は青木夏子さんと一緒に夕食前のアペリティフを飲むために再度訪れる。キールをいただいた。3回目は帰国前日の最後の夜の思い出作りにとボルドーワインを味わうために夕食に訪れた。最初サン＝ジュリアンをグラス1杯頼み、鴨料理の盛り合わせをつまみに堪能した。2杯目はサン＝テステフの赤をグラス1杯味わった。最高においしかった。次回も是非訪れてみたくなった。【吉田記】

○《La Galerie 55》 55, rue de Seine

<Galerie de l'Europe>という画廊になっている。【吉田記】

○《La Grignotière》 29, rue Mazarine

Passage Dauphine の所にあったようだが、今は地下駐車場が隣に出来ている。Histoire de Paris のワイングラスのプレートがあり、Enceinte de Philippe-Auguste の説明がしてあった。【吉田記】

○《Le Méphisto》 146, boulevard Saint-Germain - 43, rue de Seine

<La Palette>というブラスリーになっている。【吉田記】

○《La Polka des Mandibules》 22, rue des Canettes

現在はイタリア料理店で、Restaurant SANTA LUCIA。隣は、JINJI という小さな洋服店。【三木原記】

○《La Rose Rouge》 76, rue de Rennes

泊っていたモンパルナスのホテルから一番近かったので、今回の文芸キャバレー跡行脚で最初に確認に行った店である。現在は<Arlequin>という映画館になっていた。残念ながら当時を偲ばせるものは残っていない。【吉田記】

◎《Le Tabou》 33, rue Dauphine

サルトル、ボーヴォワール、ボリス・ヴィアンなどが集った有名なナイトクラブだが、現在は<Hôtel d'Aubusson>という4つ星デラックスのホテルに様変わりしている。[吉田記] 33番地の建物の中央にホテルの入口がある。そしてその入口の向かって右が〈Café Laurent depuis 1690〉で、向かって左が〈Salon d'Aubusson〉である。[三木原記]

【7区】

○《Le Club Saint-Yves》 4, rue de l'Université

<Marc Philippe>という骨董店になっている。Science Poの近くなので、多くの学生たちがその界限にはいた。パリ大学医学部も近い。[吉田記]

◎《La Fontaine des 4 Saisons》 59, rue de Grenelle

<Musée Maillol>になっていたが、休館中であった。[吉田記]

○《Le Quod Libet》 3, rue du Pré-aux-Clercs

<Hôtel Saint-Vincent>というホテルになっている。Histoire de Parisのプレートがあり、かつて僧侶たちの方が騎士たちよりも勇敢であったなどとの説明書きがされていて、通りの名前の由来が書かれていた。[吉田記]

**右岸 Rive Droite**

【1区】

○《Chez Agnès Capri》 5, rue Molière

<Bar, Boudoir, Clubbing, Figre by L'Arternative>という標記あり。[吉田記]

○《Chez Gilles》《La Tête de l'Art》 5, avenue de l'Opéra

オペラ通りにあったキャバレーであるが、現在は Cercle républicain としていくつかのオフィスやキャビネや音楽学校などの複合ビルとなっている。[吉田記]

○《A l'Echanson》 49, rue des Petits-Champs

バー、ブラスリー〈La Clef des Champs〉。Rue des Moulins と接する角地にある。朝 9 時半ごろだったので、店は閉まっていた。[三木原記]

○◀◀Milord l'Arsouille▶▶ 5, rue de Beaujolais

パレ・ロワイヤルの庭のはずれにあったキャバレーであるが、現存せず、跡には何も残されておらず。[吉田記]

【 8 区】

○◀◀L'Amiral▶▶◀◀La Villa d'Este▶▶ 4, rue Arsène Houssaye

<La Villa d'Este>という同名のレストランになっている。[吉田記]

◎◀◀Le Bœuf sur le Toit▶▶◀◀L'Œil de Bœuf▶▶ 34, rue du Colisée

6 人組とジャン・コクトーがダリウス・ミヨーのバレエの題名から取って名付けたこのユニークな名前のキャバレーは、現在同名のレストランに様変わりしている。[吉田記]

歩いて辿り着いたのが昼食時を過ぎていたので、店は夜に備えてか、準備中。丁度、表扉が開いていて、アフリカ系の作業員が店内の清掃中だったので、ボンジュールといって入っていくと、そこは、魚はじめ、各種料理用の海産物を並べている広い空間で、レストランはその奥にある。驚いたのは、この店内に、ジャン・コクトー[Jean Cocteau,1889-1963]や、フランス 6 人組の往時の写真がたくさん飾られていたこと。多くはセピア色で、かつて全盛期のこうした芸術家が、ここに集ったことを示している。許可を取ったうえで、写真撮影した。

フランス 6 人組 (le Groupe des SIX) は、ワグナー及び、ワグナー派のヴァンサン・ダンディ、クロード・ドゥビュシーの作曲技法を拒否し、反ワグナー派を旗印に、作曲家エリック・サティ[Eric Satie,1866-1925]のもとに集まった 6 人を指し、そのスポークスマンたる役割を果たしたのが、作家のジャン・コクトーだった。ちなみに、フランス 6 人組のメンバーを挙げておこう。ジョルジュ・オーリック[Georges Auric,1899-1983]、ルイ・デュレー[Lois

Durey,1888-1979], アルチュール・オネゲル[Arthur Honegger,1892-1955],  
ダリウス・ミヨー[Darius Milhaud,1892-1974], フランシス・プーランク  
[Francis Poulenc,1899-1963], ジェルメーン・タイユフェール[Germaine  
Tailleferre,1892-1983])。このなかで女性は、ミヨーの弟子ジェルメーン・  
タイユフェールだけだが、多くの作曲家・作家に愛された。[三木原記]

○《Chez Suzy Solidor》 4, rue Balzac

もはや存在せず。現在は、4番地の大きな建物には、2軒のレストランが入  
っている。向かって左が〈Restaurant SIMLA-HILL〉 Gastronomie Indienne  
と書いてあるからインド料理店。向かって右が、〈Restaurant 国賓  
(KOK-PING)〉という中華料理店。[三木原記]

○《Le Drap d'Or》 38, rue Bassano

存在せず。1階は事務所(何の事務所かは不明)、2階以上は住宅。[三木原記]

○《Le Vernet》 Rue Vernet

番地が不明なので、この通り全体を見通したが、それらしきものは存在しな  
かったように思う。[三木原記]

【9区】

○《Le Liberty's》 4, place Blanche

存在せず。この番地は、ブランシュ広場を取り囲むどこかの建物だが、周囲、  
番地が示された建物は、ブランシュ広場南側に位置する5番地のみで、現在  
はスターバックス・コーヒー店が入っている。反対のほぼ北側にキャバレー  
Moulin Rouge があり、団体バスが着いて混雑していた。スターバックス・  
コーヒー店の、向かって右側がカフェ・ブラスリー 〈Le Palini〉, 向かって  
左側がレストラン 〈Buffalo Grill〉。件の4番地を、まず、カフェ・ブラスリ  
ー 〈Le Palini〉 の前で休憩がてらタバコをすっていた店員に尋ねたが、分ら  
ないという。次に、ブランシュ広場近辺の交通整理をしていた警官にも尋ね  
たが、分らないという。[三木原記]

○◁Le Tomate≫ 46, rue Notre-Dame de Lorette

存在せず。現在は、三ツ星ホテル〈Le Tartuffe〉。[吉田記]

【18区】

◎◁Chez ma Cousine≫ 12, rue Norvins

〈Chez ma Cousine〉の店名のまま、Restaurant Cabaretとして、いまでも健在である。テルトル広場からノルヴァン通りを数メートル西に進んだ所。店の通りに面する部分は広くはないが、向かって右に〈Chez ma Cousine〉店の扉、向かって左に演奏会場が隣接している。店内入ったところの空間は狭く、つめつめでテーブルが設置されているが、両壁面には、シャンソン歌手たちの写真やポスターが張り詰めてある。奥へ入ったら、その奥行きの高さに驚いた。ぐーんと広い空間が開け、そこにもテーブルがあって、客がいっぱい。やはり、壁面には、シャンソン歌手たちの写真とポスターが張り詰めてある。夜ともなれば、キャバレーに変じ、有名でなくても、歌手たちが来て歌うのだろう。

入口そばのテーブルで、クレープのムニユ 12ユーロを食した。内訳は、(1) ジャンボンとタマゴとチーズのクレープ (他のものも選べる)、(2) 砂糖のクレープ (他のものも選べる) (3) シードルのセットだ。

店内の写真撮りたかったが、満員の客、忙しそうな店員の様子を見て、諦めた。かわりに、据え置きのお店紹介の絵葉書を戴いてきた。[三木原記]

◎◁Chez Patachou≫ 13, rue de Mont-Cenis

モンマルトルの丘の賑やかな場所にあった。元 pâtissière の文芸シャンソン好きのパタシューが、猥らな言葉をかけて恥ずかしがって答えられなかった客のネクタイをハサミで切って天井からぶらさげたことで有名になった。この文芸キャバレーで、ブラッサンスは初めて観客の前で自作の歌をびくびくしながら冷や汗を流し披露したのである。現在は〈Le Deli's〉というレストラン・ビストロと、奥に〈Galerie Roussard〉が画廊をかまえている。[吉田記]

○《Chez Plumeau》 Place du Tertre

存在せず。但し、テルトル広場の北西角に、カフェ・ピアノ・バー〈Café Piano-Bar〉と銘打つ〈Chez Eugène Crêpes Glaces〉というのがあって、目を惹いた。【三木原記】

○《Aux Trois Baudets》 2, rue Coustou—Boulevard de Clichy

現在の正しい住所は、64 ,Boulevard de Clichy

《Aux Trois Baudets》と酷似する〈Les Trois Baudets〉という名前に変えて、演奏会場、及びバー、レストランとして様変わりしている。写真に撮ったので確認できるが、次のような表記が出ていた：〈Les trois baudets Salle de concert/Bar and restaurant〉。【三木原記】

休憩を取るため、すぐ目と鼻の先にあったカフェ《黒猫》Chat Noir でハイネッケンを1杯飲む。付け出しにオリーブがたくさん出された。食べきれないくらいの量の。【吉田記】

◎《Au Lapin Agile》 22, rue des Saules

2月17日（木）の夜9時にシャンソンを聴きに訪れた。今回が2回目の訪問である。例によってサクランボのリキュール1杯で24€。最初はスイスからの観光客の夫妻など5名しか客がいなくて、これで採算が取れるのかと心配しはしたが、ショーの途中から三々五々客が増えて、最終的には20名くらいになる。以前（4年半前）と同じ歌手もいたが、何人かは入れ替わっていた。予約なしでいきなり行っても大丈夫であった。支払は帰るときに払った。かなり老齢のピアニストが大部分伴奏を務めていた。女性のシンガーが2名とホスト役を含めて男性のシンガー（いずれもかなりの年配）が5名で、総勢7名が一緒に合唱したり、入れ替わりでTour des chantsを行ったりしていた。ブラッサンスの話と歌で始まり、ブレル、ピアフ、ヴィアン、フェレ、リンダ・ルメイなどのカバー曲などを披露。ジャン・フェラ似のいぶし銀の歌手がアポリネールのミラボー橋（フェレ作曲）など曲付けされた詩

を歌ってくれた。かと思えば *Cheveliers de la table ronde* や *Jeanneton prend sa faucille* のような伝統的民衆ソングや、オー・シャンゼリゼなども歌のレパートリーに入っていた。客と対話しながら和気あいあいの和やかなムードで進行し、時間の経つのを忘れるくらいであった。ピアフが最後の夫テオ・サラポとデュエットした *A quoi ça sert l'amour* はピアフに似た声で歌う女性の *chanteuse* がアコーディオンを弾きながら歌ってくれたが、客との掛け合いで盛り上がった。ゲンスブールのジャヴァネーズやジャクリーヌ・フランソワのパリのお嬢さんなども歌われた。後は自作の *Chansons poétiques* を披露してくれた *chanteur* もいた。老人とはいえ、ピアノ伴奏はなかなかのものであった。モンマルトルで最も古いキャバレーの雰囲気は今でも味わえるのはこの店ならではの。ブリュアンやブラッサンスやヌガロなどの面影が偲ばれた。座ったのはピアニストの隣の絶好の位置で、壁から変色したキリスト像がはみ出している場所の傍らであったため、ごく間近でかれらの歌う様子を観察することができた。さすがに午前2時まで居続けることはできず、モンパルナスまでのメトロの最終に間に合うよう12時頃には店を抜け出した(前回同様)。今回は客ののりもよく、店の歌手たちも言っていたように *Ce soir nous avons un public exceptionnel!* 全員が一体となって楽しい *très sympa* な雰囲気のうち夜が更けていった。【吉田記】

以上、雑駁な調査報告ではあるが、実際に自分たちの目で現場を確かめようと足で稼いだ成果には違いない。このようなパリ探訪も、シャンソン好きには一興かもしれない。なお、各キャバレーの所在地情報は以下の文献を参照した。【吉田記】

*Geneviève Latour: le «CABRET Théâtre», 1945-1965, Bibliothèque historique de la Ville de Paris, 1996.*